

地域包括ケアを支える医療と福祉人材の養成に関する一研究（その2）

— 共修授業に係る自由記述の学科別及び年度別による比較分析をふまえて —

○ 長崎純心大学人文学部 吉田 麻衣 (8774)

潮谷 有二 (長崎純心大学人文学部・2675), 永田 康浩 (長崎大学大学院医歯薬学総合研究科地域包括ケア教育センター・9050), 奥村あすか (長崎純心大学人文学部・8773), 宮野 澄男 (同大学人文学部客員教授・8744)

キーワード：多職種連携, 福祉人材養成, 地域包括ケア

1. 研究目的

平成 26 (2014) 年 6 月 25 日に公布された「地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律」第 3 条の規定に基づき, 同年 9 月 12 日に厚生労働省により告示され, 平成 28 年 (2016) 年 12 月 26 日に一部改正された「地域における医療及び介護を総合的に確保するための基本的な方針 (総合確保方針)」において効率的で質の高い医療提供体制の構築と地域包括ケアシステムの構築及び, 質の高い医療・介護人材の確保と多職種連携の推進等が打ち出されていることから, 地域包括ケアに係る人材の養成・確保や多職種連携教育の整備が求められることは周知の通りである。

このような状況の中で, 長崎純心大学 (以下, 本学という.) では長崎大学医学部と連携し, 文部科学省の「平成 25 年度未来医療研究人材養成拠点形成事業【テーマ B】リサーチマインドを持った総合診療医の養成」として, 平成 25 年度から平成 29 年度まで「つなぐ医療を育む先導的教育研究拠点の構築—人と人, 場と場, ケアとリサーチをつなぐ総合診療医の養成」を実施し, 学習背景の異なる大学及び学科とが医療系, 福祉系の枠を超えて将来の医療職と福祉職との多職種連携に繋がる活動を積極的に展開してきた。特に, 当該事業の一環として, 平成 27 年度に開設し, 平成 29 年度まで実施した共修授業の概要や評価に関する分析結果については奥村ら (2017, 2018), 潮谷ら (2017), 永田ら (2017), 吉田ら (2018) が報告している。

そこで, 本研究ではその 1 に続き, 平成 27 年度から平成 29 年度までに行われた共修授業の自由記述において年度別及び学科別によってどのような語が特徴的に用いられていたのかについてテキストマイニングを用いて探索的に明らかにすることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

調査期間は, 平成 27 年 11 月 4 日, 同年 11 月 11 日, 平成 28 年 10 月 26 日, 同年 11 月 2 日, 平成 29 年 10 月 25 日と同年 11 月 1 日であり, 調査方法は, 共修授業 1 回目及び 2 回目の授業終了後に質問紙を用いた自計式の調査を実施した。

調査対象者は, 平成 27 年度, 平成 28 年度, 平成 29 年度の共修授業 (以下, H27, H28, H29 という.) に受講した長崎大学医学部医学科生 (H27: 124 人, H28: 120 人, H29: 123 人), 同大学医学部保健学科生 (H27: 110 人, H28: 112 人, H29: 114 人), 本学初履修者 (H27: 36 人, H28: 37 人, H29: 26 人), 本学履修済み (H28: 14 人, H29: 20 人) であった。なお, H27, H28 の本学履修者の全てが現代福祉学科であり, H29 の本学履修者は, 人間心理学科が 1 名, 比較文化学科が 1 名, それ以外は地域包括支援学科 (旧称: 現代福祉学科) であることを付記しておく。

分析方法は, その 1 と同様に, 計量的にテキストデータを分析することが可能である樋口 (2004) が開発した KH Coder (Ver. 2.00f) を用いて, 年度 (H27, H28, H29) と学科 (医学科 (M), 保健学科 (H), 本学 (J) に分類) を組み合わせて外部変数を作成し, 抽出語の

対応分析を行った。

3. 倫理的配慮

調査の実施に伴う倫理的配慮としては、授業の導入において、回答は本授業の教育効果の評価及び今後の授業作成のために使用するとともに、記載内容が成績に影響することはないこと、さらに回答を拒否しても不利益が生じないことを説明し、調査への協力を得た。また、データクリーニングの際に、個人が特定されることがないように個人情報取り扱いに留意し、必要に応じて固有名詞などのマスキングを行った。なお、本研究における長崎大学生のデータに関しては、長崎大学医歯薬学総合研究科倫理委員会の承認を得て実施され、本学学生のデータについては、日本社会福祉学会研究倫理指針に基づき実施された。

4. 研究結果（紙幅の関係上、結果の一部についてのみ記載する）

記述統計量や抽出語リスト等の分析結果については、その1を参照されたい。

次に、年度別と学科別によって授業感想文の自由記述において用いられる語に特徴があるか明らかにするために年度別と学科別の外部変数を用いた対応分析を試みた。最小出現数は34、最小文書数は1、集計単位は段落、品詞による取捨選択は「名詞、サ変名詞、形容動詞、ナイ形容、未知語、タグ、動詞、形容詞、名詞C、否定助動詞」であり、分析対象となった抽出語は225語であった。分析の結果、右に医学科が、左に本学が、中央上に保健学科が位置しており、医学科では、「機会」「有意義」「調べる」「学科」「観点」等の語を用いていること、保健学科は「職種」「事例」「専門」「看護」等の語を用いていること、本学は「説明」「ディスカッション」「質問」「言う」「エコ」「マップ」等といった語を用いているのではないかと推察することができた。

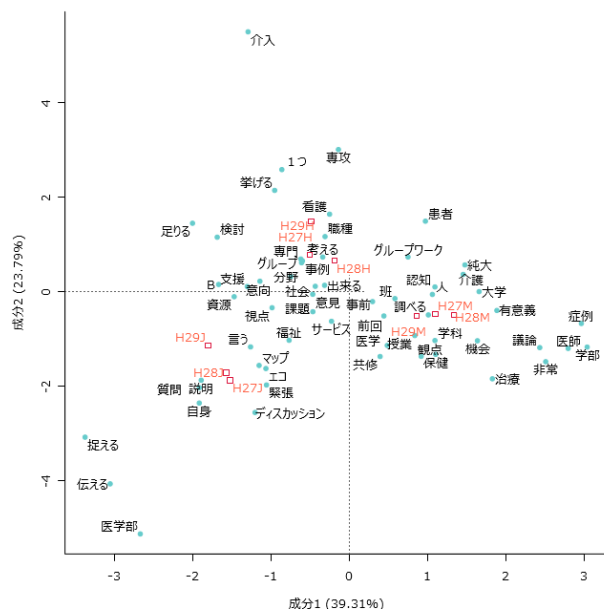


図1. 学科と年度による対応分析の結果

「質問」「説明」「ディスカッション」「質問」「言う」「エコ」「マップ」等といった語を用いているのではないかと推察することができた。

5. 考察

本研究における分析結果から、年度別と学科別に特徴的な語を視認することができ、年度別では大きな違いは見られなかったが、学科別では受講生の感想文が類似した特徴を有しているのではないかと推察することができた。

今後の分析においては、文書の抽出を行い、整理、分類した文書の意味の解釈が必要であること、さらに、本学初履修者と本学履修済みである学生の感想文を分けて分析することも検討していく必要がある。

※本研究は、文部科学省の「平成25年度 未来医療研究人材養成拠点形成事業【テーマB】リサーチマインドを持った総合診療医の養成」に係る研究成果の一部である。